

鮎川信夫・コラム批評一〇〇篇
時代を読む

鮎川 信夫

時代を読む

コラム批評100篇

文藝春秋版

時代を読む

1985 年 4 月 15 日 第 1 刷

1985 年 7 月 20 日 第 3 刷

著 者 鮎川信夫

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23 電話03(265)1211(代)

定 価 1200 円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Nobuo Ayukawa 1985 Printed in Japan

目次

ソルジェニーツィン来日の意味	13
丸谷才一の毒のないパロディ	16
人類の絶滅はあるか？	19
読書週間を終えて	22
若い世代の感性	25
松田聖子と竹村健一	28
アンドロポフの登場	31
コンピューター時代に	34
キッシンジャーの勝利	37
キッシンジャーと日本外相	40
E・Tブームの底にあるもの	43
野坂昭如の江藤淳「弾劾」	46
江藤淳の国家論は正当か	49

ピッチャーの攻撃性 52

非行少年・非行少女 55

煙草もおちおち吸えぬ社会 58

『佐川君からの手紙』の異常さ 61

小室直樹の田中角栄論 64

隣人裁判が意味するもの 67

連合赤軍・永田洋子の手記 70

太宰治『ろまん燈籠』再読 73

オーガズムと「Gスポット」 76

ソルジェニーツインの警告 79

デイズニーランドの魅力 82

『戦後史の空間』の憂鬱 85

『メガトレンド』の未来 88

『消費としての出版』 91

イーオリヨン

李御寧の俳句論 94

読みくらべ 創刊女性誌 97

レフチェンコ証言の真実性 100

海外篇《反核》アンケート 103

戸塚スクールと民主主義 106

戸塚宏の本『私が直す!』 109

「VANITY FAIR」の復活 112

『中国・グラスルーツ』 115

大江健三郎『新しい人よ眼ざめよ』 118

広告コピーは変ったか 121

「タイム」誌の日本大特集 124

サハロフ博士の提言 127

渡辺武信『住まい方の思想』 130

佐川一政の『霧の中』 133

劇画コミック『童夢』の迫力 136

大韓航空機撃墜事件の本質 139

テレビ視聴率の正体 142

山内徹『重臣たちの巢鴨』 145

「気くばり」の嘘っぽさ 148

篠山紀信と藤原新也 151

ハーレクイン・ロマンス 154

詩人・ピソツキーの死 157

ミーハーのための『見栄講座』 160

鄧小平のディレンマ 163

寺山修司の残したもの 166

オーウェル『一九八四年』 169

「十年後」は予測しうるか 172

〈日本占領革命〉の全貌 175

〈占領〉と経済の民主化 178

浅田彰の「逃走の倫理」 181

ビートたけしの道化ぶり 184

ボネガットの「武器中毒」論 187

マッカーシズムの実態 190

ロス事件とジャーナリズム 193

写真で見る「百年前の日本」 196

シヨーケンの告白的自伝 199

「兵士」となることの意味 202

迫真のロシアン・ミステリー 205

見直される「地政学」 208

ロス事件の論評について 211

ボードリヤールの理論 214

三島由紀夫とスポーツ 217

『窓ぎわのトットちゃん』 220

ダーティハリーの勝利 223

鳥羽欽一郎『これからの韓国』 226

牧田吉明『わが闘争』 229

世界の教科書が見た日本 232

プロ野球・テレビと球場 235

棋士・米長邦雄の勝負哲学 238

橋川文三『昭和維新試論』 241

『国際報道の現場から』 244

- 『中華人民生活百貨遊覧』 247
- イバン・イリイチの思想 250
- 西部邁『生まじめな戯れ』 253
- ロス五輪とカリフォルニア 256
- 『日本の国家戦略』 259
- 「中東」解説・最良の手引 262
- 飯島正『戦中映画史私記』 265
- 発達しすぎたデモクラシー 268
- ルカックスのレーガン評 271
- 江藤淳『自由と禁忌』 274
- 山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』 277
- フリーマントル『CIA』 280
- 『モア・リポート』男性版 283

坂本龍一『本本堂未刊行図書目録』 286

梁石日『タクシードライバー日誌』 289

増田みず子『自由時間』 292

『経済学』がさし示す方向 295

『マーク・トウェイン自伝』 298

極楽とんぼの『術語集』 301

宮型霊柩車は俗悪か？ 304

米国の新保守主義革命 307

「現代ロシア」を知る 310

あとがき

時代を読む

ソルジェニーツィン来日の意味

(57・10・28)

ソルジェニーツィンが来日した。『収容所群島』で一九七四年ソ連から国外追放され、西ドイツ、スイスを経て、アメリカに亡命し、バーモント州に仮寓を定めて以来、初めての海外旅行である。

彼は、レーガン大統領のホワイトハウスへの招待にも応じなかった作家である。よほど強い動機なり関心なりがなければ、日本へ来るはずがない。一体、それは何なのか。収容所から日本に至る長い旅を、一つに括る視点から、彼の目的を考えてみなければならぬ。ソルジェニーツィンは愛国者である。れっきとしたロシア文学の伝統の保持者であり、そのために、ソ連当局の忌諱にふれ、国外追放されたようなものである。

おそらく、どこにいても、ロシアが彼の念頭から去ることはない。亡命者として、ヨーロッパ、アメリカ、そして最後に日本を経験したわけだが、究極的にはロシアを顧みるためだったと思われる。この場合、日本体験を欠くことができなかったのは、あくまでもわが国の「特殊性」によると認識しておかなければならぬであろう。

日本は、ソルジェニーツィンを自由に読み、彼を招待することができる、アジアで唯一

の国である。政治家が「西側の一員として」などと言うと、どこか空々しく、時には反撥したくなるものだが、彼の来日は、このことを文化の面から逆証するもので、極東は極西に通ずるという、わが国の「特殊性」を浮彫りにするものである。

戦後の日本の政治、経済、文化は、この「特殊性」に立脚して展開、発展したものである。しかし、東西に通じるといふ融通無碍^{むげ}は、ひとつ間違えば、どちらからも疎外される危険を孕んでいる。それゆえ、少し飛躍するかもしれないが、開国と鎖国が紙一重といわれわれの心情をこそ、最も警戒しなければならぬのである。

ところで、ソルジェニーツィンは、日本を、どのように経験したであろうか。二週間、東北、関西、山陰と隠密旅行をし、農民と四時間話合ったとか、高校の数学と物理の授業を三時間参観したとか、並の招待作家とはちがった熱心さで、日本を研究したと伝えられている。彼が桁外れのメモ魔であることは、『収容所群島』の読者なら容易に察しがつく。

九日深夜放送のNTVで、彼は、法眼晋作、内村剛介のインタビューに応じ、その見解の一部を披瀝している。日本が、狭く資源が少ないという悪条件を、努力と工夫で克服していることに感銘を受けたと言い、倉敷は町全体が芸術作品であり、教育は厳格で、伝統と近代の調和で発展しているという指摘は、外国人なら誰でも言いそうなことである。ただ、彼が伝統と近代という場合、伝統（民族のルーツ）のほうに重点がかかっていることに注意すべきである。日本では、人間関係に伝統の味を残しているので、西欧のように法律にたよる度合がすくなく、そこに、いわば礼節の美德を見出しているのである、と思